



(26) <蒔枝家の宝>

ジュノには、何の事なのか！

金崎ゆきと名乗る、ご婦人の、突然の申し出に、どう反応すればいいのか、返事のしようもなかった！

直樹の運転する、ランドクルーザーは、山道をぐんぐんと登り、ヒノキなのだろうか、道の両側を深い緑が少し暗い森に変わり、時には、怖いほどの黒味があった木々が、何処までも、高くそびえたつ、太い樹木の放つエネルギーは、ジュノを緊張感で身震いするほどの感覚にする。

森や木の事に素人のジュノでさえ、明らかに、立派な樹木の森だと、わかった。

しばらく、右へ、左へ、と、ジュノの体は、否応なく揺らされて、もみくちゃにされながら、一時間は、車が走っただろうか、車道も、行き止まりになった場所で、直樹は・・・

「申しわけございませんが、ここから、もう少し、先まで、歩いてくださいますか！」と用意してきた、歩きやすい、靴を、ジュノに渡した。

ジュノは、もう、ここまで来ているのだからと、直樹の言うがままに、靴を履き替えて、直樹の後に続いて歩いた。

穂高以来、山へは出かけていないし、仕事の忙しさや、今のジュノの置かれている状況では登山や岩登りなど、出かける心の余裕もなく、久しぶりの山歩きは、足や体にきつく、息苦しさを感ぜさせた。

ただ、直樹が、何も言わず、黙々と歩くだけが、ジュノには不可解な思いだったが！

ジュノは、直樹が、変に気を使い、話しかけてこない事が、かえって、心が落ち着き、ゆっくりと歩きながら、この二年の間に起きた、さまざまな事を思い起こしながら、まるで、映画の中の場면을早回しをして見ているような感覚になる。

ジュノの願いとはかけ離れた事ばかり起きた、いろいろな事の中で、実の父の故郷で、今、いい知れぬ幸せな気持ちを感じながら、さまざまな出来事を、繰り返し思い出していた。

山を歩く事は、穂高でのあのおぞましい事故を、そして、その後のジュノの人生が否応なくついてまわる事だ！

森から、無意識に受けるエネルギーとは、人の内なる思いのようなものが、繊細な感情となってよみがえる事なのだろうか・・・

山道を歩き出してから、どのくらいの時間が経っていたのか、ジュノは、不思議と、時計さえ見る気持ちにならず、歩いていた。

息苦しさの中でも、ふと、言葉に出来ない幸福感とでも言おうか、少しずつ、ジュノの気持ちを穏やかにしてくれている事いい！

少し先を歩いている、直樹が、振り返り、ジュノに、一言つたえた。

『もうすぐです、ほら！』

『あそこの木々が切れて明るい青空が見えている場所！』

『あの場所が見えますか！』

お疲れのところ、辛いでしょうけれど、もうちょっとですから、と、声をかけてきた。

どうやら、山の稜線が交差する、ひととき明るい場所！、小さな峠に、何があるというのだろうか！

初冬の冷える風が
美しき人の頬をなでる
足先が少しだけ痛み
未来を語るように
この不安と期待が
美しき人の心がはやる
君は何を望み
美しき人に伝える
森の精霊と幻と静寂
心の声で聴く真実

ジュノは山道を歩きながら、いつの事か思い出せない、夢を見ているような、錯覚に囚われる瞬間があった。

山への畏敬の念を、知らず、知らずに、感じてのことなのだろうか！

『着きました！』

直樹が笑顔でジュノに言った！

『おつかれさまでした！』

『ここが、どうしても観て頂きたい場所です！』

そこには、少しだけ開けた、木々の間をぬうように、二十メートルの高さがあるだろうか！

いや、もっと高いかもしれないが、まるで、槍の剣先のように！

とんがり状の大岩が天に向かって突き出たように、そこだけが森の中から、周りを光照らして、

その姿はまるで

『大海原を照らす、灯台のように！』

天からの恵みの光が、樹林の海を輝かせている。

山道を下ばかり見ながら歩いていたので、近くで見上げた、その迫力にびっくりした！

あきらかに、まわりの樹林の中から、異質な力を放ちながら、聳え立つ、威厳を保ち、威風堂々とした岩峰の姿だった！

直樹が言った！、

『ゼヒ！この岩の上に登ってみてください！』

ジュノさんを、ここにお誘い出来た事の意味をわかって頂けると思いますので、と、言って、薦めてくれた。

大岩の片面は、きれ落ちた岸壁になっていて、覗き込むと、眼がくらむほどの高さだが、岩峰の半面をみて、一箇所だけ、登れると判断できる、階段状の溝がひとすじ！

それは、何か、期待と叡智のすべてを示す道のように！

岩の頂上まで続いていた。

ジュノは、直樹にすすめられるまま、岩に取り付いた。

岩に触る感触が、穂高以来の事で、少し緊張したが、それほどの危険を感じる事もなく、まるで、ジュノには慣れ親しんだ場所のように、岩のてっぺんに立って、思わず、息を呑み、歓声を上げてしまった。

明るい青空が照らす風景は、まるで、深緑の波がうねる、海原を見ているように、幾重にも連なる。

この風景の偉大さが、ジュノを圧倒して、迫り来る！

エネルギーを受けて、ジュノの血潮をたぎらせてくれる！

日本の樹林の森は、黒味がかった、濃い緑の味わい深い色あいで、ビロードの絨毯を敷き詰めたようにひかり輝き！

所々に赤や黄色のえのぐを染め、ちりばめて、描いたように！

秋の色が、この風景を際立つ、美しさは、なんと、表現しようか、しばし、言葉を失う世界がそこにはあった！

直樹は、明るく、今まで、ジュノに見せていた、どこか、緊張感のある表情から、すっきりとし

た笑顔が、とても、綺麗だった！

男性に対して、使う言葉ではないかもしれないが、とても、ハンサムと言うよりも、綺麗、「美しい」の表現が、似合う、美しさと上品さが、育ちの良さが、嫌味なく、こちらに伝わってくる！

『好青年』の姿だった。

岩の上に直樹とジュノが並んで座ると、もうあきスペースのない、狭い頂上だが、ジュノは、とても、気分が良かった。直樹は、静かな口調で

『ジュノさんに、この場所をどうしても、見て頂きたくて！』

お疲れだと知っていたのですが、ご無理していただきました。いかがですか、

『素晴らしい、場所でしょう！』

ここが、『蒔枝家の一番の美しい宝だと、私は思うのです』

そして、この場所から、見えている、ほとんどの山が、蒔枝家の所有の山なのです。

先祖代々、引き継がれている、とても、大切な財産なのです。

(27) <思いの残る帰京>

直樹はいったい、どんな、心づもりで、ジュノをここへ案内して、この、美しい風景を、見せたのだろうか！

どう、ジュノは判断すれば良いかは、ひとまずは、何も考えずに、直樹の心づかいに、素直に受け取っていかうと思うのだった。

その時のジュノには、直樹の思いや考えに、至れないほど、この美しい感動に浸っていた。

そこまで近づいてる
美しき人のさだめ
君が誘うこの深い森が
魅了する魔法の力
羞恥と理性さえも
おぼろげになる
底知れぬ欲望に
たじろぎながら
この透明な世界に
美しき人の惑い

今の、いままで、ジュノは、自分が、『蒔枝家』の直系の子孫なのだと、考えた事もなく、ましてや、蒔枝家の財産がどれほどの物か、など、考えた事もなかった。

「ただ、父の姿が恋しいような思い！」

「ジュノ自身の心のよりどころがほしかった！」

ひとのぬくもりを感じる「蒔枝の家」が、なぜか、胸が熱くなる！

そんな気がしたのだった。

直樹が、この『蒔枝家』の大きな資産を、ジュノに見せることが、どんな意味がある事なのか、その時の、ジュノは、思いも至らない、ただ、この風景が、あまりにも、感動的な、美しさでジュノは、直樹の心遣いに感謝していた。

短い、岡山での滞在も、東京に戻れば、いつもの忙しい、ジュノの外科医としての、スケジュールが、否応なく、待っていた。

りつ子が安曇野へ帰ってから、もう、どれだけの時間が過ぎたのか、ジュノは、りつ子の言う！

『特別な、プレゼント！』

とても気になっていたが、今だ、りつ子からは、何の連絡もなく、プレゼントの件もそうだが、りつ子が転院した、安曇野の病院からも、その後のりつ子の病状についても、ジュノの元へ、報告されてこない事が、気がかりだった。

りつ子の、手術は確かに、成功はしたが、末期のガンである事には、変わりなかった。
手術で、取り除く事の出来ない物があつた事が、ジュノは、安曇野の病院のりつ子の担当医だけに、伝えていた。

それは、りつ子の、家族からの願いでもあつた。
だが、言葉には出さないけれど！
りつ子はすべてを知っている！
自分の終りの近い事を！

ジュノはそう感じて、りつ子の心を思いやる、医師としてではなく、古い友人としての思いがあることが、ジュノの心を複雑なものにしていた。

クリスマスも近い、ある日、ジュノの元へ、りつ子から、荷物が届いた！
『りつ子からの特別な、プレゼント！』
これが、そうだというのか！
ダンボールの箱を開けると、大きなリボンのついた包みが、入っていた。
綺麗な包装紙に包まれた、その包みを開けると、三冊の古いノートが入っていた。
何処の、作業日誌のようであつた。

ジュノは、汚れて、古ぼけた、このノートに、何が記されているのか、心臓の鼓動が、わけもなく、乱れてしまう、自分の意志ではどうする事も出来ないほどに・・・

先ず、一冊目のページをめくつたが、ただ、単純に、作業の進み具合を、簡単に記されていた。
たとえば、「何番目の策が、壊れてしまったので、誰と誰が、作業に当たり、本日だけでは、終わらず、明日も作業に当たる事」そのような、書き込みが、数ページ、続いて・・・

ジュノは、気づいた！

この日誌は、りつ子から聞いていた、りつ子が、理事をしている、施設と同じ、キリスト教会が、運営している、安曇野の牧場があり、そこの、作業日誌のようだ。

天使と悪魔の心で
美しき人を惑わせて
理性と官能のはざままで
生きる事への問いにもがき
時として怠慢すぎる精神
軽薄すぎるほどの惨めさ
美しき人の心をかき乱して
終りの日は悲しくも来る

神は君を聖女に
姿は朽ち果てても

ジュノは、1ページから、丁寧に読んで行くと、その中には、この牧場に、牧師さまが、時々、牧場の従業員の食事や寮としての住まいを、整理整頓をしてくれる、ご婦人を案内して来た事！

そして、このご婦人は、ここに住んでいたわけではないが、何日か、お仕事をしては、どこかへ、戻って行く事が書き込まれていた。

このご婦人は言葉を話す事が出来ない事！
また、どうやら、記憶をなくしている！

自分が誰なのか、わからないのだとの、説明があったけれど、どうも偽装しているようだ！

そんなメモ書きが添えたページがいくつかあった。

このご婦人は、誰に対しても、一度も笑顔を見せた事がなく、それでいて、記憶がなく、言葉が話せないと聞いていたが、なにやら、ひとりの時には、小さな声で、歌を、歌っているところを見た者が、何人かいて、とても美しい歌声だったことを記されていた。

なぜ！、「記憶喪失を装っているのだろう！」

と、又、どんな辛い事情があるにしろ、気の毒な事だね！

そんな言葉が書かれていて、誰もが気になる存在だったようだ！

地味な服装をしていて、目立たないけど！

よく見ると「美人だね！」などと、噂するものもがいたようで、このご婦人が、ここに来た時には、男ばかりのむさ苦しい場が、何かしら華やぐ空気を作り出していて、確かに気になる女性だ、そんな事も記した、ページがあった。

そして、何年かすぎた、ある時、中年の男性が尋ねてきた事があるが、その時のご婦人の様子が、とても、怖がって、会う事を拒否して、その男性の訪問のあと、ご婦人は、突然、いなくなつて、教会関係者にも、牧場の者にも、誰にも、何も告げずに、出て行ってしまったとの、記載があった。

そのページには、りつ子の添え書きのメモ用紙が付けられていて、その時の事を知る、牧場の従業員に、私が（りつ子）会って、話を聞いてみたけれど、その女の人の怖がりようは、普通ではなく！

「恐怖で、人格が壊れてしまいそうに、表情が別人のように！」

恐れていたと話す人もいた。

尋ねてきた男性の様子を詳しく聞いてみて、わかった事ですが、どうやら、「大杉さん」のようです。

「佐高のおんじー」にも、この事を話して、聞いて見たが、たぶん、大杉さんだろうと、話していました！

そんな、書き添えが付けられていて、私の出来る事は、ここまで！

「私の力が及ばない事が、ジュノに落胆させてしまいますね！」
そんなふうな、詫びる手紙が添えられていた。

ジュノの知る母の姿ではない！

すぎましい、憎悪を見せた！

母の生きた日々のむごさからくる姿だったのか！

ジュノの知る母はいつも、穏やかで、誰に対しても、優しい言葉で話す人だった。

ジュノはもちろん、妹の樹里も、母に叱られている姿を見た記憶はなかった。

父に対しても、声を荒げての、争いなど見たことがなかった。

ジュノは、母はいつも美しくて、優しい！

幼き日に、ジュノを抱きしめてくれた、母の感触が、たまらなく恋しくて、ジュノの心が悲しみでいっぱいになった。

りつ子は、自分の体調が、悪い事は、何一つ、書かず、ジュノに伝える事だけを的確に書いていた。

(28) <ヒマラヤへ向かう>

今のりつ子の状態はおそらく、最悪のはず！

痛みが切れ目なく、りつ子を襲い、痛みを抑える為に、強い麻薬を打ち続けて、意識さえ、はつきりとしなない！

何もかもが辛い、ベットでの生活が避けようのない日常になっているだろう。

そんな中で、これだけの事をしてくれた、りつ子の姿を思い、ジュノは又、改めて、りつ子の無償の愛を感じた。

一言、一言に苦しみと痛さに耐える、りつ子の姿が見えてくる、ジュノには、かえって、りつ子の病気の進行が、早い事が、想像できて、辛かったが、ジュノの医術を持ってしても、どうする事も出来ない事だった。

人間とは本当に不思議なものだ！

あれほどの嫌味な女性だとばかり思っていた、りつ子の変身と言って良いかはわからないが、生きて行く事の素晴らしさを見せてくれる人だ！

ジュノはりつ子の後人生を、そんなふうに思えた！

りつ子の実像は充溢した心！

心のまま、せい一杯、悔いの無い生き方が出来ている事を願う！

ジュノとりつ子をつなぎあわせた、母の姿を思いながら、無意識に深いため息をつき、ジュノは切ない感情になった。

人間はいつかは死が、誰にでも、訪れる！

その持って生れた宿命！

によって、不本意な、時間を生きたり、満足な悔いの無い生き方が出来たと思いつながら死ぬる人もいるだろうが、誰でもが、良い死に方が出来るとは限らない・・・

ジュノの父や母のように！

あまりにも、不本意な命の終わり方！

死を迎えた時、どんな思いで、納得させるのだろうか・・・

両親の死を、受け入れる事を、絶対的な事実として、ジュノの人生のすべてに関係している事が、ジュノ自身の『命』をふと、考えずにはいられなかった！

私の無数の細胞が沸騰する、無限の怒りがうごめくような思いがする日々の中で、ジュノを取り込んでしまった運命を考える。

美しき人の耐えがたい
胸に捺された悲しみ
消す事の出来ない烙印
かたちのない痛み
愛と命と
美しき人の命のいとなみ
それはまるで宿命
振り払う事の出来ない
魂の叫びを
聡明な心で聴く

ジュノの体は激しい熱と悪寒の繰り返しで、まともに、冷静な心の判断が出来ない、時として、粗暴な心で、悪態をつく、なさけない男としての姿。

だが、体はどうであれ、プライドと羞恥する思いが、ジュノの中でせめぎ合いをする。養父母の優しさは、以前にもまして、暖かい心使いが、嬉しいが、その半面、ジュノは、三十八歳になる、大人でもあるわけで、時には、子供じみた、物言いが、ジュノの全身から鳥肌がたつほどの、嫌悪感を覚えてしまう！

養父母の行き過ぎた愛情は、時として、ジュノは、ふたりが大切にしている、愛玩物として共有する気持ちで、見ているのではないかと、錯覚さえ感じてしまう！
ジュノ自身の邪心であることは、わかりきっている事なのだが！

確かな事は、深い愛情を持って、ジュノを案じていてくれる、今の父と母の心はわかっている！

そんな、いこじさと心の狭さを自覚した時、とても、ジュノ自身を苦しめ、寒々とした虚栄する自分をすべて、消し去りたいと言う声が囁く！

又しても、養父母の心を踏みにじる事になってしまうけれど、ジュノは、外科医として、もう
『メスを持つ事は出来ない！』
『外科医を続けてはいけない事！』
『今までの名声がひどく重くて、負担に感じて！』

外科医としての立場のジュノではなく、そこにいる人間は、両手をもぎ取られた感覚で、ジュノ自身が見えていた。

今のジュノ自身の精神と体から判断した答え！

考え抜いて出したジュノの判断！

勤めていた大学病院へ、辞表届けを出して、誰にも、告げる事もなく、ひとりで、旅に出た！

旅支度も何もせずに、無意識に選んだ旅先は、ネパールだった。

加奈子といつか、時間をつくって行く約束の地、ネパール！、

加奈子の憧れの山！

『アムダムラム』

加奈子の願いは、いつか、ジュノが雪山に登る事に興味を持って欲しかった事。

加奈子は言葉に出す事は無かったが、ジュノとふたりでザイルを結びあい、緊張感ある、雪壁のナイフリッジを、ジュノと加奈子の緊張感を最大に高めて、心をひとつに出来た時！

今までとは、全く違う、二人の幸せの絶頂感を体のすべてで感じられる事を加奈子は望んでいた。

もちろん、登山中は、恐怖と張り詰めた緊張感で、その時は集中しているけれど、登山をすべて、やり遂げた時、言葉で表現出来ない、幸福感が、心と体を、津波のように、次々と！

それは、気持ちの高揚と体がふわふわとした、ただ、嬉しさが、全身を包んで、溶けてしまうのではないかと思えるほど、幸福で、たぶん、体験した者でないと実感出来ない事だと思う！

加奈子は、そんな感覚をジュノに体験して欲しかった！

『そんな時期が来たら、二人でヒマラヤに行く事！』

その時が来るまで！

『アマダブラム』

は、楽しみに、残しておくはね！

この言葉を加奈子は遠慮がちに、ジュノに言った事を覚えていた！

だが、ジュノ自身は、あの穂高での事故以来、登山は好きになれなかったが、心のどこかで、いつも気になる事でもあった。

その辺の事を、加奈子は常にジュノへの気づきが出来すぎるほど、の繊細な気配りの出来る女性であった。

どんなに加奈子自身の欲望が深い事であっても、決して、ジュノに対して、強い要求はしない！加奈子の強い思いであっても、お互いの立場や仕事の忙しさも考えた、加奈子の思慮深さと、心からの願いだった。

「いつか、ふたりで、ヒマラヤへ向かう！」

ジュノに対する、深い愛情を感じた、そんな時、ジュノはいつも、すまなさと、ジュノの欺瞞に満ちた、ジュノ自身の醜さを恥じるばかりで、加奈子に、申しわけない思いで、自らのお気に入りのお登山家が所属している会社だった。

ジュノは旅立つ前に、今まで務めていた、病院の近くにある、旅行社の「A・G社」を、何気なく、目にして、心をひかれて、思わず飛び込んだ！

ジュノは加奈子の切ない想いと胸を突き刺す、痛さを感じていた！！！！

(29)

この旅行社に、入った時も、ネパールへ向かう事を、確かな事と決めていたのではなく、ただ、ジュノを知る人が誰もいないところへ、行きたかった！

ジュノ自身の意志があったのかさえ、定かではなかったが、たぶん、無意識の中で、加奈子との約束を果たしたいという思いがあったのだろう。

旅行社で、カトマンズまでの飛行機便とホテルを何泊か、予約して貰っていた。

ジュノは、飛行機が大の苦手だ！

だから、無意識のうちに、関西空港から、カトマンズまでの直行便を取ってもらった。

飛行時間の短い、ネパールへの直行便を選んだ！

大阪まで、新幹線で、行く、車内での事は、ほとんど、覚えていないが、誰か？どうも、知り合いに会ったような記憶が、定かではないが、心の片隅で、気になっていた。

この出会いが、後に、ジュノを大きく、成長させて、導いてくれる、ジュノはそういった優れた人の縁を引き寄せる、強運を持っていた。

だが、この方、「清宮吉野」と言う、人物に、仕事の面で、大きな力になってくれる出会いは、まだ、まだ、先の事！

ジュノは、この数ヵ月後に、新たなる人生を歩き出す為の力を与えてくれる人だった事が、その時は気づけずに、ただ、挨拶を交わしただけで、ふたりは別れたが、「清宮吉野」は、この時のジュノの姿を覚えていて、後にその事を印象深くはなした。

『地域医療を研究、実践している事での権威、清宮吉野医師だった』

そういった点では、ジュノは人の縁の不思議さと

『魅力がある人間なのだろう！』

関空から飛び立った、「ロイヤル・ネパール機」は中国のどこかの都市で、給油の為に二時間ほど、滞在した。

その時、周りの、ほとんどの乗客が、降りて、がらんとした飛行機の中は、人々のエゴをむき出しにした、ごみが散乱した、見るに耐えがたい状況！

ジュノは、あけられたドアーから、もわあ～、息苦しいほどの重く、熱くて、湿気の含んだ風と共に、きつい臭いが、ジュノを一瞬に気分を悪くした。

鼻を突く臭いが、たまらなく嫌だった！

これから、ネパールで、トレッキングをするのか、多くの中老年と言われる人々がこの飛行機に

は乗り併せていた。

中には、登山靴を履いた人を多く見かけた。

それぞれに、これからの旅に夢を描き、楽しげに、はしゃぐ姿と興奮を乗せて、カトマンズに向かう飛行機は、時々、乱気流に大きく揺れ、一瞬、体が椅子から飛んで、宙に舞うほどの衝撃に、ひやりとさせられた！

そうかと思えば、まったく？

『飛行機のエンジン音がしない事の恐怖を！』

ジュノは、こんな時、どんな科学も文明も信じられない！

一人の気の弱い、ただの臆病な男になってしまう。

飛行機の外気？、翼が風をきる音さえ、全く聞こえない、無音の世界に、乗客たちは不確かな不安を抱き、ただ、緊張して、誰もが、冷たい汗をかき、呼吸を止めて、無音の今の状態を確かめて、

『エンジン音の響きを待つ！』

そんな事が、何度かあって、無事、カトマンズに着いた。

真夜中の一時が過ぎているはずなのに、入国カウンターを通り過ぎたと同時に、私の持っていた小さな旅行カバンを掴む、小さな手がいくつも、伸びてくる、幾重にも、折り重なるように！

絶え間なく伸びてくる、振り払っても、振り払っても、私が動く方向に、先回りしている。

少し歳かさな子のずる賢さが、ジュノをととてもイライラした気分させていた。

私は、はじめ驚きと不安で混乱したが、薄暗い中で異様なほど、その伸びてくる小さな手の持ち主は、どの子も異常なほど眼が強く輝き、たくましくて、どこか憎めない気分になって来た。

やっとの思いでタクシーに乗り、ホテルに着いた。

案内された部屋は、一人で使うには広すぎるほどの、外の雑多な風景と鼻をつく臭いとは、あまりにもちがう！

享樂な空間が広がる別世界だ！

清潔で、南国の花の香しさと色彩の落ち着いた古いヨーロッパ的な雰囲気のある部屋は、今のジュノにととても気持ちの休まる空間であった。

ジュノは何も考えずに、ベットに倒れこむように、寝た！

厚いカーテンにさえぎられた、外からの淡い光は、浅い眠りを時には妨げもしたが、さほど、眠りを邪魔するほどの事もなく！

三日ほど、何をするでもなく、時々、ホテル内にあるレストランで食事をして、お茶を飲み、ゆっくりと時間が過ぎて行く。

ホテルの中だけで過ごしてるジュノは！

「朝も、昼も、夜も」

時間という観念が消えてしまったように、眠るでもなく、起きるでもなく、何も心の中にない。

ただ、肉体がそこにいるだけのひとりの人間の存在だけだった。

誰ひとり、ジュノを知る者のいない日常が、少しずつジュノの中で変化が起きているのだが、ジュノ自身はまだ気づいてはいない！

ジュノは今、自分が何処にいるのか確かめるように！

「なぜ、ここにいるのかが、わからない時がある！」

そして、夢の中で、起きた事のように、思い出しながらも、現実の事として、受け入れるのには、あまりにも辛い、大切な人！

『りつ子と加奈子』

『ふたりの死！』

を認められずに苦しんでいた。

このような、見知らぬ地にたどり着いたジュノ！

けれど、まだ、この雑多な街が、ジュノ自身の目に見えていない、

『現実の世界！』

このような、ジュノの無意識の行動というには、あまりにも現実的ではない、ジュノの行動は、それだけジュノの中で、耐えようも無い苦痛だったが、ジュノの身近にいる人たちには、到底理解出来る事ではなかった。

だが、ジュノは誰かに、理解して貰おうとは思わずに、ひとりで、この雑多な街に身を置く事で、辛うじて、現実の苦しみから逃れられる、錯覚にとらわれていた！

「何かに、ジュノ自身が救われている幻！」

「実感の無い、感覚が、なぜか、うれしかった。」

ネパール、カトマンズの街にたどり着いてから！
ジュノは一瞬、加奈子の幻を見たような気がして、夢みる！

夢の中の君は美しくて
ただ微笑みかけてくる
瞳で私に語り
美しく咲き香る花のように
手招きをする
見知らぬ君の姿
愛する君はそばになくても
通じあえたふたりが
私をおいては行けない
この世界に生きて
見知らぬふりをする
彷徨うだけの心

「何時も、その姿は、笑顔でジュノに駆け寄って来る加奈子の姿」
「あの美しい肉体がジュノを包み込んでくれる」
「柔らかで、ジュノの手が、魔法にかけられてしまう！」
「あの全身に走る熱いエネルギー」
「ジュノと加奈子の力強い鼓動がお互いの言葉！」
「全身を幸せの波が響き渡るような感触！」

そんな瞬間を何度も夢見ていた。

ジュノは目覚めてもまるで、夢の続きがある、そんなふうに思えるのだった！
少しずつ、カトマンズの重い空気にもなれたのか、目的のない旅の不必要な動きは、時として、思いもしない風景に出くわす。

『無表情のまま、ただ歩き続ける人の波の怖さと異様さ！』
ホテルから、街の雑踏の中へ、ジュノが一步踏み出し、気づいた、人の息づかい！
いつの間にか、夕闇が迫って来たと、思った瞬間に、すべてを暗い闇が迫り来る怖いほど闇！

明かりのない、手さぐりの心もとない歩みがなお、不安感を大きくして、街中の雑多な音がジュノに迫る！

『人の足音！が、ザック、ザック、と』

それは、見えない人々が、今にも襲い掛かって来る、恐怖を感じて、見えない恐怖が増幅して行く！

(30)

ジュノは無我無中でただ、ひたすら歩いて、ホテルに急いで帰るしかない！
早朝の深い霧の中を、淡い光が射す！

眠れないままに、光射すほうへ、ジュノは又、街に出た。
目的のない、ただ彷徨う、何かに頼りたい、救いを求めて歩く、

『巡礼者のような、ジュノの姿！』

今、目の前で観る人々の暮らし、ここでは人間が自然に生れて、消えて行く情景が、あまりにも
、日常的に過ぎて行く！
この雑多な風景に、似合いすぎている！

「強烈な臭いと共に！」

「人の死が隣り合わせで起きている」

今、起きている死の現実を、誰一人、あわてふためく事もなく、道端に息絶える人が横たわって
いる傍で、神のお使いである牛がのんびりと餌を噛む光景はジュノには不思議と違和感を感じる
事のない、心に穏やかさをもたらす事であった。

夕闇の迫る対岸の川辺では死者を送る儀式の青い炎が闇と重なり、幾重にも揺れる炎！

『魂の燃え尽きる炎』

ジュノにはなぜか、恐怖などのないこの情景が、とても厳かで、美しい姿に見えていた。

その夜、ホテルのベッドで横たわるジュノは、原因のわからない、高熱にうなされて、何度も、
加奈子の名を呼び、姿を追い求めて、泣きながら、許しを請う！

何処からか、加奈子がジュノを呼ぶ声が聴こえて来るのに、ジュノは加奈子を抱きとめる事が出
来ない事がもどかしい思い！

ジュノは体の快復を待って、

『加奈子との約束の場所！』

『アマダブラムの見えるクムジュンの村』へむかった。

そこに、加奈子がいてくれるような、ジュノの身勝手な思いを抱く、微かな望みだった。
すべての願いが叶う気がした！

ジュノの傲慢さから、かすかな罪意識としてめばえた、懺悔する心が、ジュノの弱った心と体を、いつの日かふたりで旅をするはずだった。

『約束の地、アマダブラムに見える丘に向かった！』

ジュノは、そして、導かれるように、タンボチェの僧院を訪れた時、ある高僧がジュノに伝えて、言った！

『貴方の苦しみはもうすべてが消えている』

『君の愛する人たちは、すぐ近くで待っている』

『貴方は人を生かし、心を与える！』

『人の世に尽して生きる！』

『道なきみちを極めてこそ！』

『待つものへ届く道しるべ！』

この言葉が、ジュノの体から、すべての見えない鎖が解き離してくれたような思いになった！

ジュノは加奈子への愛がまだ自分の中で絶つことの出来ない、強い想いとしてある事に気づいた、改めて、自分の愚かな行動で、加奈子を死に追いやってしまった事の重大さと、後悔と自責の思いで、今、眼の前の風景！

『アマダブラム』

の美しい姿が、時として、加奈子の微笑みに見えてなお切なかった。

気がつけば、ジュノは、懺悔の思いと、何かにすぎるような、頼りなさの中で、ヒマラヤの山すそを、ひと月ほど彷徨い歩いていた。

だが、いつしか、ジュノ自身が気づかない心の変化があったのだろうか、医者としての自覚が自然なかたちで、おとずれた村々で、病める人々の苦しみをを見ていて、ジュノはその場で、出来る簡単な医療行為を施していた！

その事がジュノの心の苦しみを和らげている事も事実であった。

おおよそ、医療設備などとは言えるものではなかったが、いくつかの村には、外国からの援助で、過去に医療従事者がいた形跡があったが、そのほとんどは、使えるような医療器具ではないことが多く、時には、なぜなのか理解出来ない、驚くほどの最新の医療器具が置いてある事もあった。

電源のない山奥で、又、この最新の医療機器を使いこなす人間がいない事の現実を、どう判断すればよいのか！

これが使えると思い、この器具を運び込んだのだろうか！

あまりにも、ちぐはぐな心使いは、そこに住む人々に対しても、迷惑な事であり、失礼な事ではないだろうか、ジュノは、腹立たしく、又、暗い気持ちにさせていた。

ジュノは気がつけば、医者としての最低限の役割を果たしていた。

医療設備や薬品のほとんどない村々で、なんとか、その場を切り抜けて、ジュノは出来るだけ、請われるままに、急場しのぎの医療であっても、最善をつくして治療をしていたが、同行している、ネパール人の道案内人「パサン」は、突然、ジュノに聞いてきた。

「ミスターイ」はこのまま、ネパールにとどまって、ドクターを続けてくれるのか！と尋ねてきた！

ジュノは、いきなり尋ねられて、返事に困ってしまった。

これからどうするか、など、何一つ考えてはいなかった。

ただ、加奈子との約束だった、『アマダブラム』を観ていたい！

その事しか、頭になかったのだった。

パサンは、ジュノにストレートに尋ねてきた、病人を助けてくれる事はとても嬉しいし、ありがたいが、ネパールにいてくれるのでないのであれば

『予定を先に進めるほうがいいよ！』

ただそれだけを言って、後は、何も尋ねては来なかった。

ただ、パサンの独り言のように

『村の大切な薬が無くなってしまった！』

そう言っているのを聞いて、ジュノは人助けの為にした事が、何かが、違っていたのだと気づかされたように思いながら、何がいけない事だったのかは、今は、判断出来なかったけれど、ジュノの心に重い課題として考えるべき事なのだと思う！

ここではジュノの価値感で、物事を判断する事は、まちがっていたのかも知れない！

一時しのぎの手助けは、確かに病人の体や心を一時的には柔らげる事が出来るかもしれないが、それは見せかけの行為になってしまう事なのだろうか？、
ジュノには、どうしても理解出来ない事だった！

パサンの言おうとしている事！

ここでは、どんな時も、自力で乗り越えなくては、生きて行けない現実がある！

村人たちが出来る助け合いのルールで、生き抜く事が大切で、その為のそれぞれの意識や団結した気持ち！

人の輪のゆがみが起きる事が、一番怖い事なのだと！

パサンの、黙々と歩く、物言わぬ姿で、ジュノに伝えようとしているのかも知れない。

その後は、パサンのすすめもあり、ただ、アマダブラムにより近づける場に向けて歩いて行った

。

(31)

それは、医者としての自分を意識せずに、前へ進む事が、旅行者としての勤めなのかもしれないと思いながら。

加奈子と何度も写真で観た風景！

『アマダブラム』が今、眼の前に、聳え立つ！

その美しい姿と永遠の光に、包まれた暖かさを感じて、ジュノは、ただ、涙が流れた！

そして、タンポチェの僧院の高僧の祈りの中で語った！

ジュノに伝えた言葉を改めて、この場所でジュノは心の奥深く刻み祈った。

加奈子への詫びる思いと、恋しさがつのる！

後悔の思いがいつまで、『アマダブラム』に触れていたい！

ジュノはその場にたたずみ、去りがたい感情で祈り、冷たい風に身をおきながら、この美しい風景を、加奈子は、いつか、きっと観る事が出来るような、強い願いを持った！

ふと、ジュノは加奈子が生きていると思えて、不思議なほど、ジュノの心が穏やかになり、確信を持った！

加奈子に逢える！

加奈子に逢わなくてはと思う気持ちが、生きている事の動揺などみじんもない、確信となって、ただ、加奈子に逢いたい！

加奈子が恋しかった！

とにかく、東京に帰ろうと、決心して、立ち上がった。

美しき人は確信する

君は今私に命を

たとえようのない力

気づかない心が

約束の場所で

ヒマラヤの嶺がおしえる

後悔の心を

今物言わぬ自然の力が

生きる道しるべを奏でて

君へたどり着く想い

ネパールから帰国しても、ジュノは大学病院へ、外科医としては復帰しなかった。

むしろ今のジュノは外科医よりも、「心療内科医」として医師をつづけて行きたいと思うようになっていた。

ジュノの精神的な心のよりどころである、「ヒマラヤ杉医院」では今のジュノがすべてをつぎ込む事が出来ない、たくさんの問題や事情があった。

加奈子が死んだというマークの連絡をジュノは信じていなかった、だから、今、加奈子に逢わなくてはいけないと思う！

けれど、長く仕事から離れていたジュノは、なすべき事が多く、忙しく時間が過ぎて行く！
『加奈子の死は絶対はないと確信していた！』

確かに、加奈子に対して、ジュノはひどい仕打ちをしてきたが、ジュノの我儘を加奈子は、いつだって許してくれる事に慣れすぎていたジュノの身勝手さが、今、悔やまれるけれど、加奈子が死ぬ事など、ジュノは一度も考える事もなかった、ジュノには絶対にありえない事だった！

お互い、言葉にこそ出してはいないが、ジュノと加奈子の間に子供がいても、不思議ではない！自然な関係だったから、加奈子の生んだ、息子は、たとえ、現実にはジュノとの血縁関係がない事であっても、ジュノと加奈子の愛すべき子供として、今は、ジュノの中では受け入れていた。

だが、今、加奈子への連絡が取れない事が、ジュノには理解出来ない、生来の持つ我儘な性格なのだろうか！

加奈子の母が今、何処に住んでいるのかも知らなかったが、ジュノは不安に囚われることはない！

だが、不思議と、加奈子は生きている！と、確信しているジュノだった、その強い思いは、やはり、優れた人間性と意志の強さが確信を持たせていた。

ジュノが、加奈子に対して、ひどい仕打ちをした事で、加奈子はジュノを困らせている！
そんなふうには、考えられない、ジュノの身勝手に、ジュノの隠れた、幼稚さから来る、ジュノ自身も気づいていない、そんな思いがあった。

りつ子の死は、外科医としての認識で、受け入れられても、加奈子の死は、マークの電話連絡だけだったから確かめようがないし、ジュノは確かめる必要がないと思っていた。

だが、なぜか、混乱した中で、加奈子との約束の「アマダブラム」をどうしても見たくなくて、ネパールへ出かけたのか、今になって不思議に思えるのだった！

ジュノの中で、加奈子の存在の大きさを思い知らされていたが、ジュノは孤独だったが、寂しさや切なさには耐えられていた。

『加奈子はきっと元気にいる！』

そう思うことで、落ち着きを取り戻して、ジュノは、これからの生活を考えていた。

ネパールから帰国して、ジュノは、小さな病院をはじめた。

外科と心療内科をメインに、いずれは、総合病院として運営していく準備を進めていたが、ジュノの計画より早いスピードで、多くの事が進んで行く！

だが、ジュノは、人の縁には恵まれているようで、スタッフも、ジュノを頼りにして来てくれる者も多く、又、経営の面でも、ジュノの外科医としての知名度があることで、開業と同時に、訪れる患者も多く、順調すぎるほどのスタートであった。

入院患者用の部屋もあり、ジュノの考えていた事よりも、はるかに多い患者がおとずれてくる忙しさで、ジュノは対応に苦慮していたが、必死の思いで来る、その気持ちを大事にしたい！

『出来るだけ患者さんの希望を受け入れたい！』

だが、時間とスタッフの不足がジュノの想像をはるかに超えていて、以前よりも、ジュノ自身の体を休める時間も無いほどの日々だ！

だが、以前のジュノとはちがって、前にもまして、仕事の的確さと優秀さを発揮していた。

そんなある日、突然、ジュノの元に、荷物が送られてきた。

差出人も住所も書いてなくて、だが、長野からの取り扱い印が記されていた！

(32) <大杉さんからの手紙>

差出人の分からない荷を不思議なほど期待と不安の混じった感情の高まりを覚えながら荷を開けて、驚いたのは、母が最後まで大切に持っていた！！！！

『あの詩集、反戦の詩が載っている！』

同じ本が、三冊と大杉さんからの長い手紙が入っていた。

『大杉さんから送られてきた荷物だった』

大杉さんの手紙には、

『今、自分がいる場所は、言えない！』

おそらくは、私は、もう、長くは生きられないだろうと思う。

『肝臓がんの末期のようだ！』

『今しか、すべての事を話す機会がないと思い、ここに、すべての事を書き残す事にした。』

だが、ジュノ（寛之）も樹里も、この伯父さんを信じてくれるかが、本当に心配です！

先ず、何から、話せばよいのか、思いばかりが、先走り、言葉にならない気持ちが辛い！

たくさんの許しを請う事があって、気ばかりが焦りますが、今、この頭に浮かんだ事から、ひとつ、ひとつ、書きますから・・・

『必ず、読んでください、お願いします！』

一番に知らせたいのが、あなたたちの韓国の祖母！

『私と君たちの実の母の』

今、日本に住んでいて、元気に暮らしています。

そして、私、『大杉春馬』は、

『貴方たちの本当の、母方の伯父です！』

君たちの実の母

『イ・スジョン』

は、父親がちがうが、私、大杉の妹なのです。

君たちのおじいさんは

『イ・ゴヌ』

と言って、朝鮮半島が、日本に統治されていた時代に、小さな、出版社を営みながら、危険な状況の中で、密かに！

『朝鮮の民族が、日本の統治から独立する事！』

『日本政府の厳しい監視の中で、独立運動をしていた人です。』

その、独立運動の仲間だった、君たちのおばあさんは、十七歳の時に、『朝鮮総統府』に出入りしていた日本人に、拉致されて、ひどい拷問を受けた中で、暴行されて、その時に出来た子供が、私！『大杉春馬』です。

あまりにも、衝撃的な事で、驚いたことだろうけれど、すべての真実を、君たちには知ってほしい、知っておくべき事です。

何年か後に、私、大杉の母

『キム・ソヨン』

は君たちのおじいさんである

『イ・ゴヌ』さん

と結婚して、生れたのが、君たちの母

『イ・スジョン』なのだよ！

私の日本人の父は、誰なのか、確かな事ではないが、私が成人して、大分時間が経った頃に、私の父だと思われる人物が、外交問題を専門に研究した人物として、名をなした人物！ つい最近まで、日本の政治家として活躍していた！

しかも、朝鮮問題を研究し、論文に書いて、発表して、絶賛された事を、今、日本に住む、私の母『キム・ソヨン』は、かなりショックを受けたのですが！

私には、何一つ、話すことなく、耐え忍んで、日本で、生きて行く事を幸せな事と考えたのです。

君たちがこの真実をどう、受け止めるか、私が答えを出す事ではないと思う！

ふたつの国の不幸な時代に、朝鮮の人々は！

『民族の誇りである、朝鮮語を奪われた！』

『強制的に日本語を話さなくては、生きて行けない時代！』

『人が生れて、はじめて話す、馴染んだ言葉！』

『たとえ、朝鮮の人間であっても！』

あの時代に、日本語で育った人間は、物事を考える時に

『民族の言葉ではなく！』

『考える人の、思考回路を！』

『日本語がすべて、先んじて、決めてしまう事の、悲しみを！』

少しでも良いから、心の片すみに留めておいてほしい！

君たちが、なにより、一番知りたい事は、なぜ！、穂高での事故が起きたのか？

『真実を知る事だろうね！』

私にも、今だ、どうして、あの忌まわしい事故が起きたのか、わからないけれど、お互いの誤解から、あんなむごい事故が起きて、その後の行き違いや、まちがった情報が伝わり、君たちや、お母さんに申し訳ない事になってしまった！

ジュノはもう知っているだろうが、君たちの実の両親は、両方の家から、結婚を認めてもらえなくて、特に、蒔枝の家では、父である

『蒔枝伸一郎』は結婚したと、同時に勘当された！

その事で、岡山の実家とは、まったくの音信不通の状態になってしまった！

ジュノ（寛之）と樹里が生れても、蒔枝の家からの許しがなく、一切の連絡さえ、出来なかったから、君たちが岡山の蒔枝の家の事を知らなかったのは当然なのだよ。

君たちの母『スジョン』は、私が、兄だと言う事を知らされずに！、

たぶん、日本に留学する時に、韓国の両親からは、私は、日本での、在日韓国人の一人で、その頃には、反戦運動家として活躍していた。

『イ・ゴヌ』 『キム・ソヨン』

の大切な、日本での支援者なのだと、聞かされていたようで、私は、一度も「妹、スジョン」からは、兄として接して、又、兄として、名前を呼んでくれた事がなかった。

だから、君たちの母は、死ぬまで、血を分けた、兄の存在を知る事なく、亡くなった。

私はそのことが、何よりも悔しくて、悲しい事だ！

私自身も又、隠された『存在』だったようで、辛い！

だか、今も、実の母や義父（イ・ゴヌ）の考えが、理解出来ないけれど、何か、真実を告げられない事情があったのだと、思う事で、私も、兄だとは告げずにかげながら、妹を、そして君たちを心から愛し続けていたのだよ！

当然の事だが、君たちの実の父「蒔枝伸一郎」にも、私が、「君たちの母、スジョン」の兄だとは知らされていない！

そして、韓国への支援者の在日韓国人の仲間のひとりとして、付き合い、同郷だった、親友の君たちの父である 『蒔枝伸一郎』 へ、大切な妹『スジョン』を紹介したんだよ。

私は、君たちの家族と過ごす時間が、最高の贅沢であり、いつも、

『最高の幸せな時間だった！』

君たち家族に登山やハイキングを進めたのは、僕だからね！、

朝鮮動乱の時は、とても苦労したが、朝鮮の親族の多くは、北朝鮮で、行方不明になったが、君たちの祖父母は韓国を選んだ。

(33) <穂高でおきた事>

君たち、ふたりのおじいさん、おばあさんは、韓国人として、韓国、いや、朝鮮半島が平和な地であって欲しいと真剣に考え、宗教者として常に祈り、その後も、表立っての政治家ではなく「反戦運動」を続けていた人なのです。

韓国がベトナム戦争へ参戦する事になった時に、激しく抵抗して、おじいさんも、おばあさんも、しばらくの間、投獄された事もあるが、正しいと思う事を曲げずに、反戦運動を続けた人だ！
どんなに、辛い立場になっても

『平和への願い』

反戦の気持ちは変わらなかったが！

あの穂高での事故のあった頃に、韓国では、とても大変な

『悲劇的で物言えぬ時代』

になって、すべての運動が出来ない、独裁政治の武力に常に監視される状況になってしまった！

君たちの祖父母、ふたりに暗殺の危機が迫っていて、身を隠す事になって、その時に問題が起きて、間違った情報が伝わった事で、同じ運動の仲間からも、日本の支援者からの支援金の横領の疑いをかけられてしまった！

たぶん、韓国でも、私たちの運動を、良く思わない人々がいて、権力に連なる組織があったり！
表向きは平和で、民主主義を語りながらも、あの時代は、誰もが自由に、もの言えぬ、時代でした！

目立つ運動を極端に嫌う、良く思わない人たちもいて！ あの時の隠されてしまった、真実！
今も確かな事が分からず、とても残念で、悔しいし、真実を明かす事が出来なかった、私の不甲斐なさは、あちらの世界に行った時に、君たちの父と母にお詫びするつもりだ！

この事の真実を明らかに出来ずに死ぬ事は、

『私は身震いするほどの怒り！』

を覚えるが、もう、私にはどうする事も出来ないほど、体が動いてはくれない！

『今はただ、だれよりも、君たちに信じて欲しいのです。』

『君たちの前で話せない事が、残念ではあるが！』

『君たちは、真実を見る眼を持つと信じています！』

だが、あの頃の政府と、反戦運動の同士からの疑いをかけられ、又、何者か分からない者に私

の母、「キム・ソヨン」は謎の交通事故にあい、危うく命を奪われる危険な状況になった事や眼に見えぬ暗殺の危険が身近に迫っていた事！

そのような状況の中で、あの事故がおきてしまった！

同じ頃だった！

あの穂高への登山に誘ったのは！

『一緒に山に行ける事が、何よりの楽しみだったからね！』

まさか、あんな、むごい事故が、おきてしまうなんて、思ってもいなかった！

君たちのおじいさん、おばあさんは、政治家ではなかったが、日本の統治時代は、出版の仕事をしながら、独立運動を渾身の思いで、懸命にやっていて、とても、人々から信頼されていた、日本人の友人も多くいた人で、知識人だった。

韓国での危険な状況では生き抜くことも難しい判断し、義父「イ・ゴヌ」と母「キム・ソヨン」は、危険から逃れる為に、韓国から、出て、日本で、名前を変えて、暮らす事になり、その時の手助けをしたのが私だった事から、多くの在日韓国人の方にも誤解され、その事が、君たちの両親にも不信感を持たれたようで、穂高と一緒に歩いて話し合い、誤解を取り除きたいと、登山に誘った！

私は、神に誓って、話します。

この不名誉な疑惑を抱かれた事件には、決って、

『ふたりが不正はしていない！』

『私も不正にお金の横領など、絶対にしていない！』

『この事を信じてください！』

だが現実に、在日の方々に支援していただいたお金！

かなりの大金が、何処かに消えてしまい、誤解が疑惑を生み、私と君たちの祖父母が横領した事になってしまった事で、益々、韓国の同士の方や在日の方々から、追われる立場になった事！

その打開策を話し合う為に、在日韓国人の実力者の方、数名を、私が案内して、穂高、奥穂高小屋で君たちの両親と会い、話し合う約束になっていたが、その方々が、なぜか、来てくれなかった。

その事で、君たちの両親と話をしている時に、誤解が生れて、言い争いになってしまい、君たち家族は、急に、帰る事になって、小屋出てしまい、私は、必死で、後を追いかけた。

あの場所で、あの事故が起きた場所で、追いついて、又、言い争いになった時、つい興奮して、

君の父に触れたと同時に、伸一郎君と君は、浮石に乗ってしまって！

『滑落してしまったのだよ！』

だが、どんな言い訳をしても、君たちの父は戻っては来ない！

許される事ではないが、決して、突き飛ばすなど、絶対にしていないし、思ってもいなかった！

君の母と妹、樹里は、あの事故を眼前で見ている、私を誤解して、おそらく、ショックが大きくて、私を恐れたようだ！

韓国の両親の行方もはっきりとわからないまま、夫と、息子も、事故で、亡くなったと思い、自分たちも、いつか・・・

『私に殺されると思ったのだろう！』

恐怖と混乱の中で、君たちの母は、心が壊れていってしまい、恐怖だけが、増幅してしまったようだ！

私はもう、かなり、体も悪い状態で、ジュノと妹の樹里に、会って、今までの、君たちの運命を変えてしまった！悲惨な思いをさせた事を、何より許しを請いたい！

死んでも、死に切れない思いだと書かれた手紙が添えられていた。

何処まで私は悲惨な運命

明瞭なる姿は消えて

いつまで悲しみの道を生きるの

美しき人が願う

大好きな人は私を欺いて

この心を奪っていたのですか

今、新しい朝を迎える

しなやかなる肉体に光を

それはだれも邪魔など

出来ない大きな力

運命など打ち砕いて

自らの命が宿るエナジー

(34)

突然の大杉さんからの手紙は、ジュノに新たなる混乱と、ショッキングな真実を知る事になり、ジュノはしばらくは何も手につかない状態ではあっても、開いたばかりの小さな病院だが、患者がひきもきらずに、訪れる！

あふれるほどの患者さんに、とうとう、ソウルの両親がジュノを手助けする為に、駆けつける事になって、なんとか、現実を維持できていた。

ソウルの父の尽力で、スタッフもなんとか、確保出来て、予定された外科手術や診療を行う事ができた。

ジュノは、今まで、どんなに精神的に辛い状態であっても、外科医としての仕事に影響する事なく、メスを手にすると、あきらかに別人のように、意識を仕事に集中出来ていたが、今のジュノは、仕事に対して、あの頃のように、意識を集中出来ない事に、ジュノ自身も驚きと戸惑いで混乱していた。

何より、ジュノが驚きと混乱して、信じがたいのは、韓国の祖父母が、あの事故の直後に、日本に来て、在日韓国人として、日本に住んでいた事！

祖母は今も健在だと伝えているが、大杉さんの手紙には日本の何処に住んでいるのか、記されていない事が、ジュノには信じがたい、不信感を覚えてしまうのだった。

だが、一方では、今すぐにでも会いたいと思う気持ちも本心から願う事だった。

何度も、何度も、大杉さんからの手紙を読み返し、又、養父母にも、手紙を見せて、大杉さんの居場所や韓国の祖父母が日本に来て、暮らしていた事を尋ねても、ただ、驚くばかりで、あまりにも、想像しがたい事！ ジュノの養父母にとっても

『衝撃的な現実を知った！』

『大杉さんと実母が兄弟であった事！』

これほどの事実を知らなかった事をどう、その時の心情を表せば、言葉に出来ないほどの養父母の驚きだった！

ジュノの養父母は、韓国の祖父母や実母とは長い付き合いの中で、大杉さんは、日本に住んでいる、在日韓国人だが、日本人の大杉家に養子になっている、

『大杉春馬』として、紹介されて、年齢的にも近く、友としての確かな信頼を持つ人なのだ！と話しながらも、事実を知って、かなりのショックだった。

ただ、『大杉春馬』として、ジュノの韓国の祖父母にはじめて紹介されたのは、まだ、大杉さんが高校生位の時期で、その後も、養父は、何度も、ジュノの祖父母の韓国の家で会っていた！

『親しい友人』

『互いに硬い信頼を持つ友として』

のつきあいが続いていたのだったと話してくれた。

ジュノの韓国の祖父母は熱心なキリスト教徒であって、ジュノの実母と養母も教会に熱心に通う姉妹のような付き合いで、実母、「スジョン」が日本への留学が決まったときにも、迷う事なく、ふたりは一緒に来日した。

実母は声学を、養母は、東洋史を学ぶ、大学生として平穏な学生としての生活の中で、大杉さんを通じて、お互いの伴侶との出会い、二人の選択があった。

ジュノは実の母がどんな風に恋をして、実の父がどんな風に母を愛して、大切な故郷を捨て！そして切り離す事など出来るはずもない両親をも諦めての結婚を選ぶしか、方法がなかった事の重大さをジュノは考えていた。

ジュノ（寛之）や樹里の成長をどんなにか見せてあげたかった、だろう、岡山の両親に会わせたいと願っただろうかと、ジュノは、ただ、両親の心の痛みを思いながら、ふと、母の最期の言葉！

『ヒョンヌ』

この言葉は、母の父に対する愛の深さを表現する言葉なのだと、改めて、思い出していた。

あの深い愛を見せてくれた
暖かな背中がただ懐かしくて
もう逢えないのでしょうか
幼き日に兄と妹は
競うように肩車をねだった
大好きだった人
今何処にいるのですか
どんなに苦しくても
私に逢いに来て
貴方に逢いたい

(35) <愛から始まる残酷な日々>

あいかわらず、大杉さんの行方はわからないままだったが、ジュノは、いろいろ考える中で、血の繋がった伯父だとわかってみると、とても納得の行く事が多かったと思う、たぶん、伯父として名乗る事も出来ずに、ただ、私たちが愛おしかったのだと感じる。

そういった中で、起きてしまったあの、穂高、吊尾根の事故！

今、ジュノは、大杉の伯父は決して、父を殺そうとして、あの場所から突き落としたのではないと思う！

不幸にも、起きてしまった、偶然の出来事であっても、父を死に追いやった責任を感じていたからこそ、大杉の伯父の心が！

自分の気持ちを許せないのだろうと、ジュノは思えるのだった。

今、たとえ、命が終わろうとしていても、自分の言葉で伝える事が出来なかった！

『愛する家族であった』

『大切な人々の残酷な運命！』

『残酷な歲月』

「大切に、愛する家族」を、どうする事も出来ない、残酷な運命を背負わせてしまった事が、ただ、辛かったのだろう。

だから、今、自分の出来る事は、命が終える、最後の時であっても、誰にも見取られる事なく、残酷なまでに、自分の身を隠す事しか出来ない、せめてもの、伯父として！

「愛する家族への」償いの方法だとかんがえたのだろう！

そんな大杉の伯父の優しさが辛かった！

なぜもっと早く、打ち明けてはくれなかったのか、ジュノの心の中で、全身すべてから、父や母、そして私たち家族をあまりにも

『残酷な運命』

に追いやった人として、憎しみ、恨み、呪いたかったが、ジュノの、どこかで、その事を考えた時、どうしても、あの大杉の伯父の優しい笑顔を思い、憎みきれない気持ちになる。

やはり、言葉に出せない大杉の伯父の心が伝わって来ていたのだろうと、ジュノは思うのだった。

大杉の伯父の告白の手紙で、ジュノは又ひとつ、喜びと不安な感情が起こって、今、どうすればよいのか、いまだに、妹の樹里の行方が分らない！

大杉の伯父の手紙にも、妹の事を心配していても、行方を捜す事が出来なかったと、わびる言葉が添えられていた！

『本当にすまない！』

私もなんとしても、生きている内に、樹里ちゃんに逢いたいと、毎日、祈っているとも、書いてあった。

ソウルの父の力で、何人かの優秀な外科医とスタッフがジュノの病院に入って来てくれた事で、ジュノは相変わらず、忙しいスケジュールではあるが、養父の手助けもあり、精神的にとても、落ちつける事が、とても嬉しかった。

十歳から、十八歳までのソウルでの生活は、ジュノにとって、決して、精神的に安定した日々ではなかった。

けれど、養父母のぎこちないほどの優しさ、気づかいは、ジュノの心を不安定にして、「寛之」と「ジュノ」のふたつの精神がせめぎあいする事を、ひとつ、ひとつ、心の奥底に閉じ込める行為は、どうする事も出来ない怒りで、すべての事にめちゃくちゃにしたいほど、爆発するような思いだった日々！

そんな生活から抜け出したい思いから、アメリカにわたっても、尚、孤独と寂しさ、不安感から、心が壊れそうになっていた時に、出会い、少しずつ心を寄せ合っていた時間！

恋人としての『津下加奈子』の存在は、ジュノにとって、途轍もなく大きな力だった。

その、加奈子の心を、ずたずたに傷つけた、ジュノの行為は、あまりにも、ひどすぎる事だった。

だが、加奈子は苦しみの中で、ジュノを理解して、身を引く事しか出来ない自分の情けなさが、なお、加奈子を苦しめて、辛かった事だろう。

ジュノと面ざしが似ているという、ただ、それだけで、年若いロイが、加奈子の悲しみと孤独を何処まで理解したかはわからないが、加奈子との十歳以上も年若い少年のような、ロイとの生活が、ふたりを死に追いやるほど、ロッククライミングにのめりこませてしまった、原因はやはり、ジュノにある事なのだと、加奈子とロイの二人を知る、まわりの仲間は心配していた。

ジュノはいまだに、加奈子の死を受け入れてはいないが、その事の現実を認めたくない為に、今

、アメリカへ渡る事などの思いに至る事が出来ないジュノだった。

『ジュノの心の中で加奈子は今も生きつづけていたのだ！』

ソウルの父『イ・ジョンジン』はソウルの大学病院ですでに現役を引退していた。

『神が宿る手を持つ、天才的な、外科医で、科学者』

たくさんの言葉で養父を称えられる、韓国での生活に区切りをつけて、養父は決断して、日本に来てくれた。

だが、どんなに優秀な人であっても、老いの壁を取り払う事は出来なかった事を一番良くわかっていたのも養父自身だった。

今は、後進の指導する立場の名誉教授であったから、ジュノの病院で手助けをしても、ある程度は許される時間のよゆうがある事が、ジュノには本当に力強い、父の存在にただ感謝して、父の手助けと気使いがありがたかった。

父の助けもあり、病院も安定して、運営して行ける事で、ジュノは心の穏やかさを感じながらも『不思議な期待感を持っていた』

大杉の伯父の手紙には、妹の行方と日本にいる事を知らせた、母方の祖母の居場所が明らかにされていないが、なぜなのか！

ジュノには、不思議とすべての不安や疑問が解消される事がもう真近に、何かがジュノを導いてくれそうで、期待感を覚えている。

春の風はどんな運命も
優しく解きほぐして
美しき人に届けてくれる
あの暖かく力強い
あの人は私の家族
どんなに求めても
言葉では伝えられない
心がもどかしくて
手の暖かき美しき人
大切な私の家族

(36)

小さな病院でも、今のジュノは仕事に何より集中出来る事が、心を安定させている！

加奈子に逢いに行く事も考えては見るが、ジュノには不思議なほど確信していた！

『加奈子が生きている事に！』

『そして、大杉の伯父の言葉の真実を！』

そんな、ある日、岡山の直樹から連絡が来た。

上京して、どうしてもお会いしたいので、時間をつくって欲しいと言ってきた。

わざわざ、ジュノに会うために上京して、どんな話があるのか、ジュノは確かにまだ、岡山の「蒔枝家」の事をすべて、知ったわけではない！

ジュノは、確かに、蒔枝家の直系の子孫ではあるが、今は、国籍も韓国人であり、日本の戸籍さえない、寛之としての身分を証明する事が何もない！

『蒔枝寛之』として、これから、どう生きて行くのかを、いつかは考えなくてはならない事が、差し迫った現実であった。

だが、直樹が、ジュノの前に現われて見せた姿は、あまりにも、衝撃的な姿だった！

ジュノには、考えもつかない現実に、言葉に出来ないほどの驚きだった！

ジュノの目の前の姿は！

『美しい女性の姿の直樹！』

『そして、私が、妹の樹里です！』

いきなり、驚かせてしまい、本当にごめんなさい！

お兄さんにいつお話すればよいのか、とても悩みましたが、どんなかたちでお知らせしても、驚かせてしまう事は間違いなく、私自身も、どう、お話すれば、驚かせず、衝撃が少ないかと考えていましたが、こんな姿で、お眼にかかりごめんなさい！

先ず、何かからお話すれば、よいのでしょうか？

私も、自分が女性だと言う事は、わかっていましたが、岡山の「蒔枝家」に入った時は、まだ七～八歳の時で、父が亡くなった、あの事故の事も、あまり良く覚えていなかったのです！

私が、本当の事がわかったのは、蒔枝のおばあさまが亡くなる直前に、すべての事を話して下さいました。

その時、自分が、『蒔枝樹里』なのだと知らされたのです。

私は、あの事故の事やあの頃の事を微かな記憶でしかなくて、ほとんどの記憶がないのです！

わずかにあるおぼろげな風景が時々見えていましたが！おばあさまのお話では、あの穂高での事故で、父とお兄さんが亡くなって、あの事故の一年後位あとの時期に、母が、突然、岡山の、この家、『蒔枝家』に私を連れて来たそうです。

それも、私は、髪の毛を刈り、丸坊主にして、祖父母に、お頼みしたそうです。

『どうか、この子を男の子として、育ててください！』

『蒔枝家の後継者として、育ててください！』

『どうか、お願いします！』

ご両親に認めて頂けないまま、結婚して、蒔枝家の後継者である、伸一郎さんと孫の寛之を死なせてしまいました事、本当に申し訳ございませんでした！

この子を願う事が、伸一郎さんへの、せめてもの、私のお詫びで、

『蒔枝家の血筋を守る、唯一の事だと存じます。』

そう言って、おじいさま、おばあさまに、お願いして、母は直ぐに、立ち去って行ったそうです。

ただ『どうしても、お願いしたい事は！』

『この子が樹里である事は、絶対に！』

『誰にも知られないように、育てていただきたいのです。』

遠縁から迎えた養子として

『男の子として、育てしてください！』

そうする事が、樹里を危険から守れる、ただひとつの方法ですので、樹里だという事は、どうか、誰にも知られずに、育ててください！

と何度も、何度も、母は祖父母に頼んだそうです。

だから、私は、その時から

男の子！『蒔枝直樹』として、戸籍も作られています。

ジュノには、すぐには、理解出来ない事だった！

言葉もなく、ただ、直樹の話を聞くしかなかった。

そして、直樹は、話し続けた！

昨年夏、父の事故があった、場所で！

『吊尾根で、お会いしましたね、覚えていますか！』

またもや、驚きの事実を話した。

直樹（樹里）はおばあさまから、真実を聞かされて、一時期は、ショックが大きくて、生きて行く自信をなくしてしまい！

自分の人生のすべてに嫌悪感を抱き、何をする気力も無くして、今まで生きてきた歳月をどう理解すればよいか！

本当に苦しくて、死を覚悟して、父の亡くなったあの事故現場である『穂高、吊尾根』に向かったのだと言って、泣き崩れた！

その姿は、あの凜とした『直樹』の姿ではなく！

女性としての切ないほど、弱弱しい姿で、ジュノは思わず、抱きしめてあげたい衝動に駆られたが、やはり、たった今、聞いたばかりの妹としての樹里の姿を、どう受入れて良いのか、戸惑うばかりだ！

妹の樹里は、確か、ジュノ（寛之）より四歳年下のはずだ！

今、目の前にいる女性の姿の直樹であり、妹の樹里は三十四歳になるのだろうか？

『直樹としての姿も、凜とした、美しい姿だが！』

『樹里としての女性の姿は、美しさと気品に満ちた！』

『輝きと内面の気高さが際立ち、本当に美しい女性の姿！』

その両方がひとりの人間として、

『苦しみながら生きて来た姿だ！』

樹里は、今の今まで、兄への思いを隠して、直樹としてジュノに接していた事が、本当に辛くて苦しかったのだろう事が、ジュノにもその気持ちが、わかりすぎるほど、心に伝わって来る！

ひとしきり泣いて、落ちつきを取り戻した、妹としての樹里は、話を又、はじめた。

いままで、誰にも甘える事も出来ない、妹、樹里としての気弱さをジュノに一気にぶつけてしまったのだろう、おそらく『直樹』として、生きて来た日々は、人の前で泣く事さえ許されぬ立場だった事がジュノには予測できた。

妹、樹里は、死を考えながら、穂高、吊尾根を、死に場所を求めて歩きながら、気づいたのだと言った。

何度も、何度も、父と母に、
なぜ！

『私ひとりを残し、行ってしまったのですかと！』
問いつづけた！

そして、なぜ！

『私は、男として、生かされたのかを、考えた！』

その時の、穂高では、両親からは何の答えも出してはくれなかったけれど、ふと、思ったのは、自分だけが生き残されたのには、何か

『特別な意味がある事！』

私には、なすべき事があるのだとの、強い思いに、たどり着いたのだったと、その時の樹里の心境を、ジュノに話してくれた。

無念な思いを残したまま亡くなった、父や兄（その時はまだ兄がジュノだとは知らなかった）の悔しさを悟り、樹里は何か、なすべき事があるのだとの、思いになった！

私はただ怖くて
見えない恐怖が
大切な人を追う
美しき人は言葉もなく
心が引きちぎれるほど
切なくて悲しい
命ある事の感謝
めぐり逢えた事の感謝
君は太陽のように
輝き美しい

(37)

樹里は穂高から岡山の家に戻り、蒔枝家の仕事をしながら、あの事故の事や母の行方を捜しながら、大杉さんの事を調べていて、母の異父兄弟で、伯父である事もわかり、又、今、蒔枝の家にいる、樹里（直樹）の世話をしてくれている、女性『金崎ゆき』はじつは、韓国の祖父母と共に、日本に来た韓国人の『ハン・ウギョン』と言う、母の祖父母達と共に！

独立運動や反戦運動をしていた人だった事を、金崎さん自ら、韓国を離れる事になった、いきさつを話してくれて、韓国の祖父母も、日本で暮らしている事を知ったのだと、樹里はジュノに話した。

大杉の伯父の計らいで、樹里の乳母として、日本に来てから、程なく、蒔枝家に住む事になって、樹里を手助けしてきたのだった。

だが、樹里（直樹）の知る限り、大杉の伯父は、蒔枝家には一度も訪れてはいないし、あの事故以来一度も、大杉の伯父には会ってはいないのだと話した。

ただ、祖父母とは連絡を取っていたように乳母の金崎さんから聞いていますと樹里は話した。

蒔枝家と大杉家とは親戚筋にあたる事でもあり、大杉の伯父の養父母が健在の頃は、親戚づきあいで、樹里も、祖父母のお供で、何度も大杉家に伺っていたけれど、大杉の伯父には一度も会う事は出来なかったと樹里は話した。

そして、寛之が自分の意志とは関係のないところで、大杉の伯父と養父母の善意から、運命をかえる事になった！

『ジュノとして、韓国に渡ったと同じ頃！』

祖父の『イ・ゴヌ』と祖母の『キム・ソヨン』が日本に渡って来たのだと話した。その時に、金崎ゆき、こと「ハン・ウギョン」も一緒に日本に来たのだった。

その後、三人は、名前をかえて、在日韓国人として、政治運動的な事はせずに日本で暮らしていた。

だが、樹里（直樹）が最近、知った事は、大杉の伯父の手引きで、日本に渡って来て、ジュノたちの祖父母の日本での生活や経済的な援助をしていたのは、たつての大杉の伯父の願いもあり、大杉家と共に、親戚筋にあたる蒔枝家もかげながら、手助けしていたのだと、樹里は「金崎ゆき」から聞かされて知ったと、ジュノに話した。

だが、祖父の「イ・ゴヌ」は十五年ほど前に病気で亡くなったが、祖母の「キム・ソヨン」は岡山の蒔枝家に近い場所の高齢者医療施設にいて、少し「アルツハイマー病」があるが、健在で、

八十九歳になっている。

娘である、ジュノと樹里の母 『イ・スジョン』 が亡くなった事はまだ知らされていない！

けれど、先日、樹里はこの祖母に
『孫、樹里として』会ったのです。

と言って、樹里は又、泣いた、妹はもう、こらえようのない、心に重くのしかかっていた、いろいろな重圧に耐えられなかった。

ただ、泣きくずれるしか、自分の気持ちを伝えられない、もどかしさがあった。
『母が亡くなった事をどうしても知らせる事が出来ない！』
『樹里に話せないジュノ！』

もうこれ以上、辛い思いをさせたくなかった！。
今まで、思うさま泣く事も出来なかったのだろうと、樹里を思い、ジュノは、その事が又、切なくて、胸が痛む！

大杉さんは伯父としても、父の友人としても、事故のあと、一年が過ぎた頃に、寛之は父と一緒にあの事故で死んだ事を伝える為に「蒔枝家」を訪れて以来、来ていないと樹里はジュノに言った。

実際、大杉家へもあまり帰ることもなかったようで、大杉の両親が亡くなった時も、葬儀は『蒔枝家』が、親戚筋でもあり、大杉家には他に家族と言える者がいない事で、蒔枝家が、代わって、とりおこなわれたのだが、そのお葬式やその他の行事に、直樹（樹里）は手伝いをしていたが、大杉の伯父は来なかったが、何日か過ぎた時期に、お墓にお参りしている姿を、見かけた人がいたようだったと、樹里は話した。

ふるさとを離れて
孤独に生きる事が償い
あの暖かな背中を
美しき兄と妹が求める
いま何処で耐えて
心を閉ざした優しい人
ただ逢いたいのです
恨む思いも
憎しみの心も

父と母がつむいだ愛

今も、ジュノも樹里も疑問に思いながらも、大杉の伯父は、自分の命があとわずかだと思いながらも、愛する大切な家族を、不幸のどん底に落としてしまった事の責任を、どうする事も出来ない苦しみと懺悔するような思いで、孤独に耐えながら、身を隠しているのだろう。

ジュノは、幼かった頃の大杉の伯父の優しい眼差しが、思い出されて、今、伯父の置かれている状況の厳しさを思うだけで、辛く、悲しく、とても、伯父に会いたいと願わずにはいられない！

「今、どこで、どんな姿で、苦しみに耐えているのか！」

美しい姿の樹里は、数日、東京で過ごして、ジュノの養父母とも、初対面ながら、打ち解けて、特に母とは女性同士！話も合うのか、とても楽しそうに微笑む笑顔がとても美しく、その姿を見ている時、ジュノは心が熱くなり、思わず、全身が震えるほど和む。

樹里は、時には実の母のように思えるほどの感覚になるようで、お互い遠慮がちではあるけれど、よく笑い、話していた。

幸いにも、養父母は長く日本に住んでいた事もあり、日本語も話せる事で、樹里との意志が通じ合える嬉しさを、そばで見ている、楽しい事だった。

そして、突然、まだ、幼かった頃に実の両親と暮らしていた家、東京の、我が家で、クリスマスのお祝いのパーティに、大杉さんと一緒に今の両親が、来てくれて、楽しく過ごしているジュノ自身の幼い頃の思い出がジュノは懐かしい夢を描くような、胸が熱くなる、幸せを感じていた。いままで、一度も思い出す事が無かった、父の笑顔！

いつも、生真面目な、学者の顔！

母が父を呼ぶ

『ヒョンヌ』

の声も鮮やかに！

とても、懐かしい、一瞬のうちに、ジュノは十歳の幼い日々！

『母の唄う、アベ・マリア』

あの頃の事が浮かんできた！

ソウルで、養父母と暮らしていた頃には、思い出せなかった事、心の奥深く閉じ込めていた、思い出だった。

おそらくは、ジュノは、無意識に、感じ取っていた、養父母への気遣いから、そうさせていたの

だろう！

兄と妹として、幼い頃の事を、お互いがまだ、素直な気持ちで話せるほど、親しさを見せる事が出来ない、ぎこちなさはあるが、顔をあわせる度に、ただ嬉しくて！
一言の言葉を交わす度に！

お互いの心が近づく喜びを感じていた。

だが、樹里は、岡山へ帰る時は、『直樹』として、男性として、帰って行った。

その姿は、ジュノにとって、悲しみと樹里の毅然とした、振る舞いの清々しさを感じた。

岡山では、『直樹』が女性だと知っているのは「黒崎かね」だけだった

し、戸籍上も『蒔枝直樹』であり、仕事上も「直樹」として生活する事が、今は仕方のない事だった。

ジュノは、樹里が帰るときに、大杉の伯父から送られてきた荷物の中にあった！

『イ・ゴヌ』と『キム・ソヨン』の名前の記された！

古い詩集を一冊、樹里に渡して！

たぶん、私たちの生まれるずーと前の頃！

おじいさま、おばあさまが、独立運動をしていた頃に、出版された物だと思うけれど、私たち家族にはとても大切な本なのだろうと思うから、と、樹里に伝えて、渡した。

古い詩集が物語る

忌まわしい歴史も

美しい言葉でつづられて

激しい言葉でつづられて

受け継がれた思い

愛する大切な家族へ

伝えたい平和を

人としての希望を

年老いた私の願い

美しき人へ幸多き事を

(38)

思いもかけない姿で、ジュノの前に現れた、妹の樹里！

それは、驚き、驚愕し、ジュノの混乱はしばらくの間、止めようも無いほどの鼓動が勝手に、早鐘を打った、あの時！

『ジュノはすべてのものに、感謝したい気持ちになった！』

『あれほど激しく願っていた、ただひとりの妹！』

『ジュノのすべてをかけて、愛を注ぐ、妹、樹里！』

その姿は、あまりにも近いところに、居てくれた事の驚きと感謝！

少し、落ち着けば、嬉しさと、信じられない現実、ジュノは戸惑いと、表現出来ないほどの、ゆっくりとした感情の喜びと感謝の気持ちに、あついものを感じさせていた。

直樹が、妹、樹里としての姿でジュノの前へあらわれた！

確かに、信じられない思いではあっても、直樹として、接していた時も、どこか、特別な感情が働き、いつも、心の奥では、妹、樹里を感じていたように思う！

直樹としてジュノに接している、樹里もまた、同じ用に、心が動いていたのだろう。

そして、驚きはしたけれど、元気で、しかも、実父の家を守る、大事な人としての役割を果たしてくれていた事が、ジュノには嬉しい事ではあるが！

樹里のこれからを考えた時！

心から喜べない思いで、複雑に痛む、思い心！

岡山に帰った直樹（樹里）がこれからどう生きて行くかは、ジュノはアドバイスとしての手助けは出来ても、答えを出してあげる事は出来ない、難しい問題が多くあった。

君はどんな姿でも

私には愛おしい

この思いのすべてを

言葉にして伝えよう

美しき人の生きる力

今この心が君を支えて

記憶のすべてを

君の為に

正しき道を歩む

けがれなき頃のぬくもりを

ただ、樹里の幸せな生き方を願い、祈りながら、言葉にならぬ、もどかしさで、ジュノ自身の考

えさえ、決めかねる！

『心の優柔不断さ！』

に、すまないと、心の中で詫びた。

ジュノにとっても、ある意味、眼に見えぬ何かに、樹里と同じように決断をせよと迫られているような思いでいたのだった。

ジュノは、日本人でありながらも、『寛之』として、なにひとつ、生きた記録や証しがない！ジュノの中の思い出とわずかな記憶だけが存在する！

あの事故のあと、大杉の伯父はなぜ、寛之としての、この私の存在を消してまで、ジュノとしての私をつくり上げなくてはいけなかったのかが、ジュノは、今でも、大きな疑問として、心の中で大きく残ったままだ！

かなり、体調が悪いと、思われる、大杉の伯父の行方をジュノは必死で、捜したが、わからないままだった。

伯父の手紙では、もう、命もわずかだと書かれていた。

伯父は、こんな方法でしか、自分の心の中の罪の重さに耐えて、自分を痛めつけることしか、償う事が出来ないと考えての事なのだろうと、ジュノには想像出来た。

ジュノは、今、ただ、大杉の伯父がたまらなく、恋しく、会いたいと思う！

そして一言、恨み言ではなく！

『ただ、感謝の言葉を、言いたかった！』

『伯父さんの優しさを、いつも忘れられなかったと！』

そう伝えてあげたいと、ジュノは本心から、思えるのだった。

疑問は、疑問として、これからも『なぜ！』の思いは残るだろうけれど、あの、大杉の伯父が、私や樹里へ知らせる事が出来ない何かがあるのだろう。

かたくなに拒んだのには、それだけの理由があつての事だったと今、思えるのだった。

いつか、歳月が過ぎて、どんな理由であっても、許しあえる事として、きっと、私たちが知る時が来るのだろう、その時まで、自然に時の流れのままに受入れて行こうと思うのだった。

たとえ、大杉の伯父からの言葉ではなくても、きっと、心から信じ伝わるだろうと、ジュノは今

、 そう思う事にした。

(39) <ジュノと直樹の選択>

そんな時、岡山の直樹（樹里）から、手紙が届いた！
先日の東京での事！

驚かせた事を詫びて、お世話になったお礼と血の繋がった、家族としての接する事の喜びと幸せを感じた事などが書かれていた。

そして、手紙の中には、思わぬ人からのたよりも入っていた！
まだ、一度も逢えずにいる、大切な人！

祖母『キム・ソヨン』からの手紙だった！

『愛しい孫、イ・ジュノへ』

どうぞ、このばばに逢いに来て下さい！
たくさんお話がしたい！

『言葉にならない思いと愛しさで、この胸が張り裂けそうです！』

ジュノへのわびる言葉は、会ったときになんべんでも、何度でも、言いましょう！
今は、ただ、大切な事！
ジュノに知っていてほしい事をここに書かせてください！

もう、知っていると思うけれど、貴方たちの母と大杉さんとは兄妹ですが、父親が違いますが、今、その事を詳しく、説明する事は出来ません！

大杉の伯父さんの父親は、朝鮮がまだ、日本に統治されていた時代に、朝鮮にいた日本人です。
名前を言えるような人物ではなかったのです！

伯父さんも知らないと思います、だから、貴方たちも知ろうとは思わないで下さい。
ただ、私は、伯父さんを生んだ事は、決して、誰に恥じる事無く、

『あなた方の、伯父さんをととても愛しています！』

そして伯父さんの養父母である、大杉家は統治時代に朝鮮で、貿易会社を経営していました。
私たちの独立運動にも、日本人である立場上、表立って、賛成してはもらえなかった。
けれど、とても、親しい関係でおつきあいをしていました。
かげながら、財政面で助けて頂いた事もあります。

だから、朝鮮が日本から独立した時に、大杉家には子供がいなかった事と伯父さんの父親は日本人でもあるので、大杉夫妻の実子として、大杉夫妻と一緒に日本に渡ってきたのです。

その後の朝鮮は、言葉にする事も出来ないほど、むごく、虚しい戦争と混乱した時代が続きました。

同じ、朝鮮民族同士が殺しあう、戦争の時代は、親しい人間関係を、醜く、憎しみ合い、いがみ合い、人間として、相手を否定しあう、戦争、悪魔の支配する時代がつづいて、私たち家族のほとんどが死んだり、又、今現在、北朝鮮といわれている地へ渡って行ったあと、行方も、生死さえ、今も分からないままです。

(40) <生きる事>

韓国に住む私たちも、ベトナム戦争！

アメリカが仕掛けた戦争に、追従を迫られて、韓国も参戦する事を反対する運動の中で韓国での、反戦運動が難しい状況になった時に、貴方たちの伯父である大杉さんが、私たち三人を日本に連れて来てくれました。

在日韓国人として、翻訳の仕事をしてながら、今日まで生きてこれたのは、大杉家や蒔枝家の助けがあった事も聞いています。つい最近まで、私たちは、娘である！

『スジョンの家族は、あの山での事故で、全員が亡くなったと！』
思っていました。

確かな事ではないのですが、韓国での私たちの運動を反対する組織により「抹殺」されたもの
と聞いていました。

たとえ、どんなに、平和を願い！

『戦争など無意味な事！』

と言いつづけても、身近な愛しい家族をも犠牲にしての運動に疑問を感じた事もあります。
けれど、今もまだ、多くの地で、同じ人間同士、同じ民族同士や信じる神がちがう事や、権力者の欲から、争いが起きている事がとても悲しい事です。

どんな正義を旗印にした戦争であっても、犠牲になるのは、権力など無縁な、無欲で、弱い立場の人々です。

あの無差別な攻撃によって、幼い子供の血まみれの姿！

あのいたいけな幼児に、どんな武力が、権力持っていて、いったい、どうその権力を行使したと、言えるのでしょうか！

私たちが、平和を理想とする！

人間として、穏やかに暮らせ、ささやかな幸せを願う！

自分が考えた、言葉の言える社会！

あの時代、確かな事ではありませんが、あの事故の原因を作った、あの頃は、韓国では、とても政情が不安定な時期でした。

大杉の伯父と貴方たちの父や母の尽力で、在日韓国の方々より、多額の平和運動の為の資金を頂きました。

とても『巨額のお金だった』と聞いています。ですが、そのお金が、何処かに消えてしまい、私たちと、大杉の伯父、

そして、貴方たちの両親が、韓国での運動の仲間から、又、日本での在日朝鮮人の方々の協力を裏切ったかたちになった事で、疑いを持たれ、私たちは、難しい立場になりました。

日本からの 『運動支援資金』

は韓国の私たちの反戦運動の団体に送られて来た事になっていましたので、韓国では、私たちに横領の疑いがかかり、政府機関に、投獄された時期もありましたが、そんな中で、私たちは、命を奪われる危険が迫った状態から逃れる為に、私たち三人！

『イ・ゴヌ』 『キム・ソヨン』 『ハン・ウギョン』

は、「大杉春馬」の手助けにより、密かに、日本に来日した！

それは、とても危険の伴う行動でした。

今、現在も、あの時の運動資金！

『巨額のお金』の行方はわからないままです。

ですが、これだけは、

『知っていてほしいのです！』

『絶対に、私たちも！大杉も、もちろん貴方たちの両親も！』

『一円たりとも、横領などしていません！』

『この事だけは、絶対に、信じて下さい！』

この事が、すべてにおいて、大切な人たちに、悲しみや辛い運命を背負わせてしまった事！

私たちは、たとえ、無実であっても、償いきれない、災いを招いてしまったを許す事が出来ないでしょうけれど、重ねて、信じて下さい、その事の真実が明らかにする努力を、私は今、しているのです。

ふたりの子供！ 『大杉春馬』と 『スジョン』

ふたりの孫！ 『ジュノ』と 『樹里』

私たちの大切な家族へ！

ただ、信じて欲しくて、それだけが、今の私の願いです。

私たちをかげながら手助けして下さい

『大杉家』と 『蒔枝家』に感謝しています。

何でも、大杉さんご夫妻は、蒔枝家とは親戚筋の当たる家なのだと聞きました！

大杉夫妻が朝鮮に住んでいた時、人の良さから、詐欺にあい、ほとんどの財産を失い、失望のあまり、死を覚悟した時に、私たちや、独立運動の仲間から、たくさんの励ましの言葉や、援助で、生きて行く、気力を取り戻して、その後を頑張れたのだと、聞きました。

その時、とても心に深く刻まれた言葉！

『人間はどんなに侮辱されても、生きる価値がある！』

『どんな、状況の中でも、人として存在する事に意味がある！』

『たとえ、民族の言葉を奪われても、朝鮮の人々は！』

『心を奪われても！命ある限り、生き抜く事！』

このような、励ましを胸に刻み！生きる事に失望していた、大杉夫妻は、この朝鮮の地で、とにかく頑張って、生き抜く覚悟と、決心をされたそうです。

(完)